

アメリカで何を掴み取りたいか

札幌第一高等学校 文理北進コース 2年 大橋 輪

私の将来の夢は、日常生活で身近に使うような製品をデザインし、作ることだ。

私は日々生活していく中で多くのものに触れているが、中でもとりわけ心動かされるものがある。

それは、動物の顔の靴下や機能的でシンプルなハサミだったり、神社仏閣などの歴史ある建築物、創られた当時は最新式だった口マン溢れるクラシックカーだったりする。私はそんな自分でも心動かされるものを作りたい。そして、自分と同じように、自分が作ったもので誰かの心を動かしたいと思う。もし、それが誰かの生活を豊かにしたり、役立つものであれば、そんな素晴らしいことはない。

しかし、思いついたものをいざ、形にするのは簡単なことではない。ものづくりをするには、アイデアの種となる多くの知識や経験と、それを組み立てて新しいものを創り出す力が必要である。

私は今現在、その力を養うために特に行っている取り組みが二つある。

一つ目は、私が十年以上続けている三条神楽だ。毎年、北海道神宮で神様に奉納するために行われている舞で、約150年の歴史を持つ。伝統ある神楽は、私に日常とは異なる視点を与えてくれ、十年以上続けていても常に新しい発見がある。

二つ目は部活動だ。私は美術部に所属している。美術部のメインの活動は、高文連への作品制作だ。このほかに学校祭のポスターや学校見学会のパンフレットなどの、学校の広報関係の資料作成も行っている。

高文連の制作では、長時間をかけて一つのテーマに取り組み創作する事で、自分を表現する力を養っている。その結果として、今年は高文連で全道優秀賞を頂くことができた。自身の小さな積み重ねが評価され、意味のあるものだと感じ、大変嬉しく思った。

学校の広報関係の資料制作では、伝えなければならないことと、自分の表現したいことを合わせつつ期間内に完成させることを要求される。難しいけれど、多くの人に自分の制作物を見てもらえるのでやりがいのある活動だ。

一つ目の活動は自分の中に経験などの多くの蓄積、吸収するために行い、二つ目の活動は吸収したことから新しいものを生み出す活動となっている。これらの取り組みからも様々なことを学んでいるが、まだまだ物足りずさらに多くのことを経験、吸収したいと思っている。そのため、今回のホームステイに応募しようと考えた。海外での経験は私が今までに体験したことのない新しい刺激を与えてくれるはずだ。

私がアメリカで掴み取りたいものは日常生活への再認識だ。つまり、「当たり前の発見」である。「当たり前の発見」とは、自身にとっては当然のこと過ぎて気付かないことだが、異文化の人から見ると意外なことである。

例えば、日本に来たアメリカ人に日本のことについて聞かれたとしよう。多くの人は彼に日本の自然や伝統文化、歴史のことを伝えるだろう。それはたいていの場合正しく、的を射た答えだ。だがしかし、アメリカ人の彼が心動かされるのは、水道水をそのまま飲むことや、路面に自動販売機があること、便座の温かさかもしれない。それらは、私たち日本人にとってはとても些細で当たり前のことで、見落とされがちなことだが、文化の違う人にとっては新しい発見なのだ。

ものづくりには、そのような「当たり前」の良さを再認識することがとても重要である。しかし、悩ましいことに「当たり前」は人から教えてもらうことがとても困難な情報である。そのため、私が現地に行って自分でそれを発見する必要があるのだ。アメリカ人の紹介できないアメリカの良さを。

「当たり前の発見」はどこにあるのか。おそらく、日常生活の至る所にあふれているだろう。なので、スーパーマーケットや公園、学校などあえて特別ではないところに行きたいと思っている。そして、日本との違いは何なのか、なぜ違うのかを見つけていきたい。

さらに、多くの人とコミュニケーションを取りたい。「当たり前の発見」は地域の差によって生じる概念の中にも隠れているからだ。さらに、帰国した後には、逆に新しい日本や北海道の良さが見られるかもしれない。そうして、留学での発見は次々と新たな発見をもたらし、私にとって無限の創作と探求の源となるだろう。

私は一度も日本から出たことがない以前に、まだ飛行機すら乗ったことがない。まだまだ未熟な高校生だ。だからこそ物事を素直に捉え、新鮮なものの見方ができる一番のタイミングなのではないだろうか。

私には将来ものづくりをしたいという明確な目標があり、実現のため自分を確実にスキルアップしていきたいという、強い向上心がある。また、アメリカで得た経験のすべてを自身の成長の糧とし、社会へ還元したいと強く考えている。